



学校だより

平成29年 4月28日
練馬区立田柄第二小学校
校長 谷田 弘子

HP <http://www.tagara2-e.nerima-kyo.ed.jp> e-mail info@tagara2-e.nerima-kyo.ed.jp

教育目標:元気な子ども・考える子ども・思いやる子ども

No.470

子供のために・・・と言うけれど

校長 谷田 弘子

田柄通りのハナミズキの花が満開です。さまざまな花が咲き乱れ、木々の緑が増し、成長の季節を迎えています。

新1年生も学校にすっかり慣れ、楽しく生活しています。6年生のお兄さんやお姉さんが、しっかり面倒を見てくれたお陰だと思えます。学級編成替えのあった学年は、新しいお友達作りに一生懸命です。たくさんのお友達ができ、楽しい学校生活が送れることを願っています。

さて、私たちが子供を前にするという言葉に、「子供のため」というのがあります。子供のことを案じて発する言葉として、親としては実に自然な言葉です。しかし、この「子供のため」と称して、親が子供に対応する内容によっては実は、「子供のためにならない」ことも往々にしてあります。

「我が子は自分の思っていることを口に出して言うのが苦手な性格だから、子供の気持ちを私が伝える」「自分の子供時分は家が貧しかったので、我が子にはそんな不自由をさせたくない」「今日は荷物が重いので、自転車で荷物を運んであげる」等、巷でこういう言葉をよく耳にします。一見、子供がこのようなことで困っていたら、訴えてきたりすると、つい口に出してしまう一言ですが、よくよく考えてみると何か欠けている発想や視点があることに気付きます。

私たちが発する「子供のため」という言葉は、言い換えてみれば「子供の将来のため」という発想が基にあるはずです。子供の将来とは、子供が社会一員として「自立した生活」をする将来のことを指すものです。

つまり、「子供のため」というのは、子供が自立していけるために力、しきりに言われている「生きる力」を身に付けてやること、そのものだと思います。

先に述べた「子供のため」の項目もそうした視点で見直してみることが大切です。我が子の将来のためにも、自立のためにも、逆に障害になることは、子供のためにもやはり避ける方が賢明です。

多くの動物は、子孫を残すために子育てをします。しかし、その子育ては本能的に、子供の自立を基本にしています。必要以上の保護は将来の自立の能力を奪い取ってしまうこと、ひいては、種の存続を危ぶませるものにつながっているかのようです。有名な話に、ライオンは数頭の我が子を崖から突き落とし、這い上がってくる子だけを百獣の王として育てると言われています。しかし、そこまでいなくても、私たちの気持ちの底に留めておきたい教訓のように思います。

私の母親も過保護の最たるものでしたし、のちのち自分自身で自らの性格を変えていかなければならない場面に多く遭遇して吟味したものです。当時も今も親の愛情はありがたく、感謝をしています。子供を精神的にも肉体的にも強くたくましく育てたければ、子供の本来の力を信じ、真に困窮したときに、手をさしのべてやれば十分であると私自身が実証しています。

何を子供に任せていくかは、学年の発達段階によって差があるとは思いますが、できるだけ保護者が見守って、自分の力でやらせることで、子供は自信を付けていくのです。時間がかかることですが、今後の子供たちの人生には重要な体験となります。